

チベタン・チルドレンズ・プロジェクト

2013年収支報告書



2013年決算の解説

2013年の決算については前頁の通りです。当期収入合計4,756,022円で、これに前期の繰越金が加わり、運営に充分な財源を確保できました。当期支出の合計は3,969,420円。当期の収支は、786,602円の黒字となりました。ご支援いただきました皆様に、改めましてこの場をお借りして御礼申し上げます。

クンデ・ハウスはデチェン・ドルマの入居により、現在15名となりました。生活と教育全般にわたって養育しているため、クンデ・ハウス事業がTCPの支出のうち約80%と大きな割合を占める状況となっております。チベット予防医学室は少しづつではありますが、TCPへ還元できる収益をあげられるようになってきています。TCPの宿泊施設も、のべ274泊ご利用いただき、264,653円の収益を得ることができました。昨年は休止していたトレーニングセンター事業は、4か月間の期間限定で自立支援事業を行うことができました。

ネパール現地事務所の支出は、全て税金とネパール産業省の監査費用とそのために弁護士に依頼した書類製作費です。東京事務所の支出は、ネパール現地からの依頼で購入した衣類、日用品などの支援物資、プロバイダの契約更新費、国内、国外郵便送料と封筒などの資材代金です。

黒字で終えることが出来た2013年ですが、ネパールの不安定な政治状況、これに付随する物価の上昇を思うと、今後も堅実な運営姿勢が必須であると考えております。また長期的にはネパールでの不動産の取得を視野に入れて活動しておりますので、今後も会計ごとに黒字を積み重ねて行けるように努力をして参りたいと思います。

2013年運営の報告

2013年の運営を振り返り、解説を加えたいと思います。

1年間の主な出来事を右にまとめてみました。

◆ 転校と引っ越し

2013年の最も大きな変化は、クンデ・ハウスの子ども達の転校と、TCPの引っ越しです。

チベット人としての教育を受けさせたいとの意向から、ネパールの地元校グリーンカンティンブルから、様々な方の協力と根回しでチベット亡命政府組織が運営するナムギャルスクールに転校させて3年（亡命手帳を持っていたものは4年）が経ちました。昨年の報告書でもお話しさせて頂いた通り、正直なところナムギャルスクールの学力は低く、転校直後は「もっと勉強したい」と子ども達から不満が出るほどでした。

学力レベルの低さに加えて、教師の能力と責任感の不足、度を越えた体罰、クンデ・ハウスの成績優秀な生徒に対する著しく

2013年の主な出来事

- 4月 クンデ・ハウスの子ども達の転校
- 5月 デチェン・ドルマが入居
- 7月 チベット予防医学室で初のレクチャー
- 10月 TCP引っ越し
自立支援プロジェクトの実施

不当な扱い、それを是正できない教育委員会の体制など、年を追うごとに学校側への不信感が募りました。安心して子ども達を預け、その能力を引き出すためには、チベット語での教育にこだわるよりも優先すべきことがあると考え、より良い環境を求めて転校させることと致しました。多くの学校を見学し、授業料などを含めて総合的にもっとも適した学校としてバヌバクタ学校を選定し、3月に子ども達に転入試験を受験させました。

昨年の報告書では、成績優秀で本人が希望した場合のみ、転校させるとの考えをお伝えしておりましたが、1名を除いて転校したがったこと（女児1名は、友人関係の継続と本人のシャイな性格から、転校に不安を頂いていました）、1名だけをナムギャルに残しては、現実的にはその生徒に様々な不利益が発生しそうな状況であることを踏まえ、全員を一斉に転校させました。

ネパールでの小学生の転校は、手続きさえすれば完了するという訳にはいかず、学力が見合うものであるか厳しくチェックされます。準備期間の後に受験した結果、ネパール語以外は成績優秀で（普段、全く使わないために、概してクンデ・ハウスの子ども達はネパール語が苦手です）入学が許可され、晴れて全員で新しい学校生活をスタートさせました。



転校させてすぐに、この決断が正しかったとスタッフは確信しました。毎日学校が楽しくて仕方のない様子が、どの子からもあふれ出でていました。学校での授業内容も多岐にわたり、これまでにはなかった、演劇、化学、武道の授業などを新しい教科として習うことになりました。子ども達を引き付ける興味深い授業の内容は、非常に充実しています。時には体の内臓を粘土で作ってくる宿題や、新聞の時事問題の切り抜きが課題として出たり、カトマンズ市内の史跡を巡ってレポートを書くなど、帰宅してからもスタッフ総出で大騒ぎしながら宿題をこなす日々でした。

生活全般についての指導も徹底しており、制服にはきちんと毎日アイロンをかけることが求められ、少しでも乱れがあると厳しく注意を受けるため、身なりを整える事が子ども達の習慣となりました。



また学校には民族の日があり、この日にはそれぞれの伝統的な服装と食べ物をお弁当として持参して発表することになっています。ネパールの中にも様々な生活様式や信条が異なる人がいること、そしてそれに優劣ではなく尊重しあうことなど学ぶ機会を得て、大きな刺激となりました。また山岳民族の中には、貧しく学校に通うことができず、幼少から労働に従事させられている子ども達がいることを学び、自分たちの恵まれた現在の環境を自覚し、恵まれない立場の人たちに何が出来るのかを考える機会となりました。

「チベット難民」として常に援助される立場というこれまでの学校での教育の枠組みを超えて、広い視点でのものを考える環境に身を置くことが出来たことは、子ども達の未来に非常に影響をもたらしていると思います。

バヌバクタの授業料は、平均的な公務員の給与の約半分程度と高額です。入学に際しては、地元のネパール人の協力を得て、一括納入で年間授業料の30%割引という特別交渉を成立させることができました。

このような恵まれた環境で教育を受けさせる選択肢を得ることが出来たのは、ひとえに皆様のご支援のお陰です。この場をお借りして、ご理解とご支援に感謝いたします。



ナムギャルスクールには、新学期から全員を転校させる意向を早くから伝えておりましたが、いざ転校が決まると強硬に退学を拒否されるなど、最後まで信頼関係を揺るがす状況が続き非常に残念でした。

人格も知恵も兼ね備えた、社会に貢献できるチベット人の育成を目標に、今後も子ども達の教育には力を注いで参ります。

次に2013年のもう一つの大きな出来事である引っ越しですが、条件の良い物件に巡り合い、無事に引っ越しが完了できました。ここからはいわゆる現世的、客観的な話ではありませんが、誤解を恐れずありのままをご報告させて頂きたいと思います。

以前よりTCPの建物の土地が、靈的に良くないと占術師より指摘を受け、これまで何度もチュウ（チベットの儀式で、僧侶がその肉体を餓鬼に食べさせて昇天させるという非常に危険を伴うもの）を実施してきました。しかしながらそれらの儀式は短期的には効果があるものの、根本的な解決には至らず、子たちの長引く体調不良、加藤の腰骨、尾てい骨の骨折、建物内での数々の不思議な現象、それらを毎日体験するスタッフや子ども達のストレスが我慢の限界を超え、引っ越しへと至りました。

占術師によると、この土地にはあまりにも強力な結界が張られているとの事です。事実関係を確認すると、もともと寺院として建設を始めた以前の建物は、その着工の際に高名なリンポチエが儀式を行い、結界を張ったことが分かりました。しかしながらこれ



により、もともと沼地であったこの土地に以前より住む悪しき者たちが身動き出来なくなり、チュウで何度も払っても、取り去りきれない…というのが、見えない世界で発生している出来事との説明でした。代表によるとチュウのレベルも非常に危険で、靈的に根本的な土地の改善を図ることは不可能に近く、病気や怪我、怪奇現象などの現実的な不利益を思うと、引っ越しをすることが最良との結論に至りました。

これまで何度も何度か、ブログを通してこれらの不思議な話を伝えしたことがありましたが、まだまだチベットやネパールでは、この世だけではない世界と、密接に関係しあって私達が生きているフィールドが存在していると考えています。今回の引っ越しに関して、現代的な価値観で考えると一連の話は「眉唾」なのだと思います。しかしながら TCP はこの世もある世も含んだ、大きな枠組みの中で生かされていることを真に据えて、その価値観に基づく判断の結果、今回の引っ越しを実施しました。

今後も TCP の決断が、現代的な価値観では「如何なものか」と思われるようなことがあるかも知れませんが、代表をはじめ、長年



の行を修めた行者や僧侶の判断を尊重し、全ての存在が平穏で幸せであることを願って都度、やるべきことを決断して参りたいと考えております。チベット的な価値観や判断について、ご理解を頂きたくお願い申し上げます。



◆ 新たなプロジェクト

トレーニングセンターの新たな試みとして「チベット難民の医学生と青年への自立支援プロジェクト」を、企画、実施致しました。TCP は当事業の実施に際して、かながわ財団「かながわ民際協力金」の平成 25 年度助成団体に選出され、全体予算の半額をご支援頂くことになっております。

鍼灸師であり会員サポーター様である田島ゆう子さん、その他にも講師 2 名を招き、鍼灸、介護の授業を開催しました。ボンポ・ゴンパの医学校と提携し実施した授業は大変好評でした。針治療はチベット医学の中にもありますが、使用する鍼の太さが日本のもののはうが細く、経絡やツボなどの考え方にも共通点もあれば相違点もあり、非常に有意義な授業となりました。

受講生たちは、今後のプロジェクトの継続に対する要望が強く寄せられています。殊に鍼灸は、さらなる実践的な治療方法の指導など、具体的なニーズも上がってきています。初回で何事も手探りであった準備に関しては、いろいろと反省点もあり、次回はこれらを踏まえてより内容の濃い授業がスムーズに行えるように、すでに次回の開催に向けてスタッフの打ち合わせを始めております。

10 月の開催が、ネパールの秋休みと重なり、医学生たちが山に薬草採取に出かけてなかなか戻らないなどのハプニングもあり、予定していた開催時期が少し遅れてしまいました。このため、次回の開催は、2015 年 1~2 月を現在のところ予定しております。

◆ その他のご報告

3月には国際基督教大学リテラシー研究会の現地調査対象として、学生の受け入れを行いました。南アジアの中でも識字率が低いネパールで、難民への教育と識字への取り組みに関する調査に協力をさせて頂きました。この調査に先立ち、東京事務所と学生のオリエンテーションも行いました。

7月には、伝統漢方研究所の会員様32名をお迎えして、アムチによりチベット医学の講習を2日にわたって行いました。日本伝統漢方研究所の皆様は、中医学の医師、薬剤師など、それぞれ医学的な専門家です。同じ医学の分野の知識が豊富な方たちとの交流はアムチにとっても大きな喜びがありました。専門家同士、意気投合し、大変盛り上がりました。

チベット医学の深遠な知識が正しい形で伝わるように、今後もあらゆる機会を作って、伝統的なチベット医療の普及と伝承に努めたいと思います。

2013年はテレビ取材の打診が2件、取材協力の依頼が1件ありました。メディアに取り上げられることは、飛躍的に知名度を上げると予想されますが、同時にチベット支援という性質上、様々なリスクも考えられます。そのためTCPとしては、基本的には露出に関しては慎重な姿勢を貫いています。

テレビ取材のうち1件はNHKの番組を制作する会社からのお話で、ご担当者の熱意と、チベット難民に対する曇りない視点での取材姿勢に、時代の変化を感じずにはいられませんでした。チベット社会にとってプラスになるような番組の制作を、長期的な信頼を築きながら、機会を伺いつつしたたかに作って行くという



考へで合意しております。実際に番組が制作されるまでには、クリアーセねばならぬ問題も山積みですが、より多くの方にチベットの現状と深淵な仏教文化を知っていただくために、地道に打ち合わせを重ねて行きたいと考えております。

昨年も報告書でお知らせしたとおり、優秀なスタッフの確保は、非常に困難な現状です。そのような状況の中、スタッフの増員が出来ぬまま、この1年一人でクンデ・ハウスを切り盛りしてくれたイシ・チュドゥンは非常に優秀で、真面目な働きぶりでした。スタッフとしてのみならず、一人の若い能力のあるチベット人として、TCPに在籍したことが少しでもプラスになるようにと、日本語教室にもTCPの負担で通わせています。今後はさらに本人の希望により、パソコン教室など一般事務に必要なスキルが身に付くように、カルチャーセンターでの講座などを受講できる環境を準備したいと考えております。



本年はTCPの宿泊施設において、のべ274泊ご利用いただき264,653円の収入を得ることができました。TCPから徒步圏内にあるボンボ・ゴンパに、アメリカ在住のリンポチエが戻られて一ヶ月に渡って大規模なティーチングが開催され、ここに参加されるメキシコ、ブラジルなど中南米からのお客様を多数お迎えし、期間中は特別に割り引いた価格で宿泊施設を開放しました。1年

を通じてみると大きな収入ですが、スタッフが不足している現状では宿泊施設の運営は難しく、また新しく引っ越しをした建物には宿泊スペースが確保できないため、宿泊施設の運営は2013年で一旦休止いたします。

チベット予防医学室はこれまで、多い年にはのべ2500名をこえる患者さんを診察しておりましたが、TCPの施設の統合により、診療所がスワヤンブナートの中心地からかなり遠くなってしまったことで、患者数が著しく減少しました。2012年はその対策として、以前診察室を開院していた場所に再び分室を設けましたが、スワヤンブナートのバス乗り場整備に伴う再開発で、分室の建物が取り壊し範囲となつたため、年末で分室を閉鎖いたしました。ネパール政府の開発に際しての態度の強引さは地元の人たちには有名で、保証もなくある日突然、建物が壊されて立ち退かれます。そのリスクを恐れて撤退を早めに決断し、2013年はあまり急いで無駄な投資にならぬようにと、開発の状況を見守りつつ診療所の物件を探してきました。実際のところ開発計画は



具体性を帯びず、以前借りていた分室の建物も未だ解体されていない状態です。

このような状況であったため、製薬と販売に力を入れ、寺院等への出張治療を行うなど様々な試みを行ってきました。しかしながらやはり今一度、便利な立地に診療所を設け、地元の方々に医療を提供することを主軸にした体制に戻したいとの意向から、2014年早い段階で、スワヤンブナートの中心地区に診療所を移動させる考えであります。

2013年12月末現在のサポート会員は、里親サポートー15名、月間サポートー28名、年間サポートー13名です。新しくメンバーに迎えたデチェン・ドルマも里親をお引き受け下さる方がいてくださいり、大変ありがとうございます。皆様のご支援に、改めて感謝を申し上げます。

2013年のネパールの物価は、手元の記録から計算すると、食料、エネルギーともに前年比約120～140%です。為替はTCPの1年間の円→ネパールルピーの換金レートの平均が、2012年は0.88に対して、2013年は0.96です。

チベット予防医学室のアムチ、現地統括責任者の加藤ちあきに関しては、TCPより給与は支給しておりません。また東京事務所も、一切の活動を無償のボランティアで運営しております。これは各人の「TCPは一切が菩薩行」という仏教的な動機によるものです。

無償のスタッフも、運営自体には大きな責任を負って仕事をしておりますので、よりよい運営のためにも、ぜひ忌憚のないご意見をお寄せ下さい。TCPは熱意で行動することから始まった組織であり、スタッフは社会福祉事業に特化したスキルを持っている訳ではありません。そのため至らない部分も多いと思います。今後もぜひ、皆様のご指導を賜りたいと思っております。



2014年の運営指針

2014年の運営は、下記の項目に力を入れたいと思います。

- ① 安定した運営の継続（そのためのスタッフ補充）
- ② チベット予防医学室の移転と、診察に主軸を置いた運営

①について。ネパールでは政治が安定しない状況が長く続き、物価は上昇し、ゼネストも相変わらず1年間に何度も実施されます。ネパール政府の中国に配慮した外交姿勢のため、チベット人の亡命も現在では非常に困難になりました。また昨年ボダナートで起こったチベット僧の抗議の焼身自殺以後、生前に関係の深かった関係者の不当な逮捕、投獄、財産の没収など、チベット人への見せしめも身近に行われるようになりました。経済的、環境的因素から、2014年は拡大路線を取らず基礎をしっかりと固め、地道な運営に徹したいと思います。

②チベット予防医学室の移転については、2014年の出来る限り早い日程で、再びスワヤンブナートの中心部に近い場所に、移転を実現させたいと考えております。

先の報告でもお話しした通り、ネパール政府の急な開発計画に巻き込まれるリスクを恐れて、2013年はスワヤンブナートへの移転を決断できずおりましたが、具体化しない開発案に決断を先延ばしすること止め、リスクを含んではいるものの、再び中心部にチベット予防医学室を構えたいと考えております。高度な医術を安価（必要に応じて無料）で提供し、多くの方々の人生の質が高まるように努めて行きたいと考えております。

昨年、一昨年と収支報告でお願いした、サポーター様のご見学の際の物資の持ち込みに関して、皆様のご理解とご協力を賜り、ありがとうございました。

新しくご入会頂きましたサポーター様もおられますので、今一度、内容についてご案内させて頂きます。

ご訪問の際には、ご連絡を頂きました段階で個別にお伝えをしておりますが、現地に持ち込む物資について必ずご相談ください。またご相談の上で決めたもの以外は、どのような些細なものでも決してお持込にならないでください。

クンデ・ハウスでは、持込の物資や、子ども達へのプレゼントを厳しく規制させていただいております。「訪問者がある=何かもらえる」このような条件付けを、子ども達にさせないために、これまでいろいろとご協力をお願いをしてきたTCPでしたが、やはり遠くから休暇をやりくりして、お越しいただくサポーターさんのご苦労を思うと、少しぐらい…とスタッフも気を緩めてしまう時期もありましたが、この2年間については徹底して基本姿勢を貫いています。



サポーターの皆様には、何度も申し上げている事なのですが、まだ物質的に日本とは比較にならないネパールでは、日本から持ち込んだほんのちょっとしたものがとても目を引いたりします。数年前から子どもの誘拐（人身売買、移植用臓器の摘出が目的です）が発生している事もあって、子ども達の安全を確保するためには、目立たぬ事、地元並みである事がとても大事なのです。

また、これはとても微妙な問題なのですが、何かことが起こったときに、そのストレスの矛先がマイノリティーや、弱い立場の人に向かう場合があります。TCPの現地施設は、加藤を除けば全員がチベット亡命者です。国を逃れてきて、ネパールに間借りさせていただいている身分です。ネパール国民にとっては、言わば「よそ者」なのです。ここ数年、ネパール国内の政治が混乱し物価も急上昇して、国民の生活は目に見て苦しくなっています。このような状況では、いくら寛容で、争いを好まない性格のネパールの人達で

あっても外国の支援で生活している難民の生活のほうが恵まれた暮らしをしていてはよい思いを抱かないのも、当然のことと言えます。

このような理由から、TCPは地元並みであること、地元の方々に受け入れていただくための活動に力を入れています。

ご訪問いただく皆様には、いろいろなお土産を持って行って子ども達を喜ばせたいという思いがおありかと思うのですが、子ども達自身の安全のために、持ち込み物資に関して事務局が厳しく規制をさせていただく事を、どうぞご理解を頂き、ご協力を賜りたくお願い申し上げます。子ども達の本当の喜びは、ただ一緒にそこで同じ目線で遊んでもらうことです。何か道具がないと遊べないのでなく、サポーター様がお帰りになった後でも、子ども達だけで同じ遊びが出来る再現性のある遊び方を教えて頂きたいのです。

またお菓子などのいわゆる消えモノや学習に関する道具も同様です。良かれと思ってお持込を頂いても、まったく環境も状況も違うネパールでは、それが思わぬ結果を招いたりします。どうぞ、必ず事前にご相談を頂き、TCPの運営方針にご協力を願いいたします。

ご見学のお申し込みの増加に伴い、2014年は会員サポーター様以外のご見学を、全面的にお断りする方針とさせて頂きます。学術などの各種調査の対象としてのご訪問、ご見学も同様です。

少しでもチベット人社会の現状を知っていただければとの思いから、これまでサポーター様以外のご見学も受け入れて参りましたが、物資の持ち込みなどに関して正しくご理解が頂けず、またご見学者の思惑としては「思い出づくり」としてクンデ・ハウスの訪問を位置付けておられる場合が多く、子どもたちにとって良い影響を与えないために、このような方針とさせて頂きます。

ネパール政府の媚中政策はますます露骨になり、チベット難民への締め付けが格段に強くなった2013年です。今、チベット難民達は閉塞感であふれています。

このような中にあっても希望を失わず、正しい動機を活動の中心に据えて、各人が自分の持ち場で力を尽くして責任を果たすことには勤め、喜びと感謝を忘れずに、着実にプロジェクトを推進して参りたいと思います。

